

ミシガン大学公衆衛生学部における「フォトボイス手法」の開発

放送大学教授 岩崎 久美子

フォトボイスとは

「一枚の写真は一〇〇〇の言葉に値する」
 (“A picture is worth a thousand words”)と
 いう英語の格言がある。写真による記録は、
 視覚映像の臨場感を伴う実証的データであり、
 現実を即座に共有できる効果的学習材料
 である。

「写真 (photo) + 声 (voice)」の合成語で
 あるフォトボイス (photovoice) とは、ミシ
 ガン大学公衆衛生学部 (Caroline Wang と
 フォード財団の Mary Ann Burris) によつて
 開発された写真を用いたコミュニティを基盤
 とするアクションリサーチの手法である¹⁾。

フォトボイスでは、写真を撮影することが
 コミュニティの問題を確認、説明し、改善を
 目指すプロセスに参画する始まりである。撮
 影者は、コミュニティを変革する記録者であ
 り潜在的なカタリスト (触媒) である。そこ
 で用いられる写真はパワフルなアドボカ
 シー・ツールとして、キャンペーンや展示を
 通じ、政策立案者やより広範な大衆の関心を
 喚起するものとなる。

フォトボイスは、周辺に追いやられている

人々やマイノリティの人々の現実やものの見
 方を記録する優れた手法である。ミシガン大
 学公衆衛生学部の教員により開発されたこと
 からもわかるように、生活の困窮、差別、疎
 外、孤立といった社会課題の改善を目指す学
 問領域で用いられることが多い。また、フォ
 トボイスのプロジェクトに関わる者が当事者
 の場合、自分たちの現状を認識させ、主体的
 に社会変革に関与できるようにエンパワーメン
 トする目的も併せ持つ。

理論的源流

フォトボイスは、ブラジルの教育学者パウ
 ロ・フレイレ (Paulo Freire) の教育実践に
 原点がある。フレイレは、貧困、飢餓、大地
 主制による搾取が横行する当時のブラジルの
 状況下で抑圧され、文字を奪われ、沈黙の文
 化下に置かれている非識字者に、読み書きを
 教える教育実践を行った。その目的は、自分
 たちの置かれた生活の境遇をめぐる対話を通
 じ、人々をエンパワーメントすることにあつ
 た。フレイレが主宰する識字学習の集まりで
 は、住民が自分の身近なスラム、ゴミ、掘立
 て小屋といった生活の一場面を切り取った写

真を目の前に置いて、みんなで徹底的に読み
 込んで議論し、自分たちの現実体験を対象化
 することが行われた。フレイレは、個人の意
 識を変化させることが、最終的に社会の制度
 的、社会政治的变化につながることでありと
 主張している。

フレイレは、当時の政権において反体制と
 見なされ亡命を余儀なくされたが、問題提起
 型の教育はその後世界に広まり、その手法の
 一部が発展的にフォトボイスの開発につな
 がったと言える。

社会課題の改善に向けて

フォトボイスとは具体的にどのようなもの
 か、開発者の Wang がカリフォルニア州コン
 トラコスタ (Contra Costa) 郡で実施した母
 子健康プログラムを見てみたい²⁾。
 コントラコスタ郡は、サンフランシスコ近
 郊のベイエリアに位置し、住民の人種構成は
 多様であり、経済格差も大きい地域である。
 このような中では、貧しく弱い立場にある住
 民の意見は吸い上げられ難い。

プロジェクトへの参加者として選定された
 のは、十三〜五十歳からなる六〇人の住民で

あつた。参加者は、まず、フォトボイスのや
 り方に関する三つのセッションからなる研修
 に参加した。次に、使い捨てカメラを提供さ
 れ、母子健康に関する家庭や地域における社
 会的資源やテーマに沿って関心のある写真を
 撮影してくるよう指示された。その後、参加
 者は写真を持ち寄ってグループ・ディスカッ
 ションをし、結果、子供のリクレーションの
 ための安全な場所の確保や郡近隣のコミュニ
 ティ環境の改善すべき点の提言を行った。
 母子健康の領域では、通常、低出生体重児、
 母子死亡率、十代の妊娠の予防などの施策が
 取り上げられがちであるが、参加者の提言は
 母子健康センターの専門家とは全く異なるも
 のであつた。母子健康センターでは、フォ
 トボイスによるプロジェクトで明らかになつた
 地域の真の関心を踏まえ、取り上げるべき施
 策の優先順位を拡充し、参加者の提言を積極
 的に取り入れた。

このように、フォトボイスは、地域住民の
 声をまとめる手段でもあり、記録としての写
 真といった実証データとともにその声を政策
 立案者に届けることを可能にする。

授業での導入の仕方

フォトボイスを開発したミシガン大学の
 Wang によれば、フォトボイスは、具体的
 に次の九つのステップを踏む。

- ① 意見を聞いてもらいたい政策立案者やコ
 ミュニティ・リーダーといった聴衆対象者
 を選定する。
- ② フォトボイスの参加者のグループを選定す
 る。
- ③ 参加者にフォトボイスの手法を紹介し、カ

メラ、電源、倫理的配慮などのやり方につ
 いての話し合いをファシリテートする。

- ④ インフォームド・コンセントを得る。
- ⑤ 写真撮影のための初期テーマを設定する。
- ⑥ 参加者にカメラを渡し、カメラの使い方を
 再確認する。
- ⑦ 写真撮影の期間に参加者に提示する。
- ⑧ 再度参加者を集め、撮影した写真について
 話し合い、最終的なテーマを特定する。
- ⑨ 参加者と一緒に写真を共有するフォーマッ
 トや、聴衆対象者とのストーリーを練る。³⁾
 Wang の九つのステップを踏まえ、大学の
 授業で用いる場合には、表1のような写真撮
 影、グループ討議、写真選択・説明付与、振
 り返りといった簡易なワークショップが簡便
 であろう。フォトボイスの手法を活用するこ
 とで、学生間に個人や地域の課題についての
 対話が喚起され、選んだ題材に基づく各自の
 ストーリーテリング、そして文脈のコーデ
 イングの作業を通じ、省察的議論とともに共同
 で新たな知識創出がもたらされる。

学生の指導について

フォトボイスは、大学の授業の授業では
 フィールドワークの一環として用いられるこ
 とが多い。また、大学のみならず高校におけ
 る探究学習の動機づけにも有効と考えられ
 る。地域課題に取り組み契機として、探究学
 習の導入時にフォトボイスの手法を用いるこ
 とは、撮影を通じ生徒の身近な環境への関心
 や地域課題への問題意識を喚起し、グルー
 プごとのテーマ設定にも積極的関与を促すこと
 になる。

大学の授業では、フォトボイスは、社会学、

表1 フォトボイスの大学での授業例

ステップ	内 容
1 手法の学習	参加者でフォトボイスの手法について学習する。
2 写真撮影	参加者各自がテーマに関わる身近な写真を撮影する。
3 グループ討議	参加者が撮影した写真を持ち寄り各自が説明する。
4 写真選択・説明付与	写真の中からテーマに関わる主要な写真を選択し、その説明を付与する。
5 振り返り	テーマについて考察を深め、対応策として提示する考えを整理する。

社会福祉など社会
 事象のリアリティ
 を追求する学問分
 野において有益と
 考えられる。特に、
 コミュニティを基
 盤とする参加型・
 探索的アクション
 リサーチとして、
 学生に社会問題へ
 の関心を抱かせ内
 省をもたらし、
 フィールドワーク
 の一環として導入
 しやすく、また学
 習効果を上げるの
 に良い手法である
 ように思われる。

1 注
 Wang, Caroline C. & Burris, Mary Ann, "Photovoice: Concept, Methodology, and Use for Participatory Needs Assessment," *Health Education & Behavior*, vol.24, no.3, 1997, pp.369-387.

2 Wang, Caroline C., "Youth Participation in Photovoice as a Strategy for Community Change", *Journal of Community Practice*, vol.14, no.1-2, 2006, pp.147-161.

3 Wang, Caroline C., & Pies, Cheri A., "Family, Maternal, and Child Health through Photovoice", *Maternal and Child Health Journal*, vol. 8, no.2, 2004, pp. 95-102.

4 参考文献
 Latz, Amanda, O., *Photovoice Research in Education and Beyond: A Practical Guide from Theory to Exhibition*, Routledge, 2017.